

徳用村の悲願

徳用村には、古来から村の鎮守として白山社がありましたが、明治の初めごろには、そのご神体がありませんでした。

そこで、明治四年（1871）八月、徳用村の肝煎仕平は、前藩主であった前田齊泰の徳を慕い、その直筆をご神体にしたいと考えました。そこで、徳用村が属していた富樫組の十村の瀬尾孫左衛門の手代である建部次吉を通じて、嘆願書を金谷御殿に仕えていた赤井喜内・山崎遐福翁に提出したところ、八幡宮のご神体、縁起書、銭百貫文を授かることとなりました。

当時、一農村であった徳用村にとっては予想外の朗報で、九月に齊泰が東京へ移住する際も徳用村から餞別を献上するなど、これ以降も、村と前田家の関係が続いていきます。

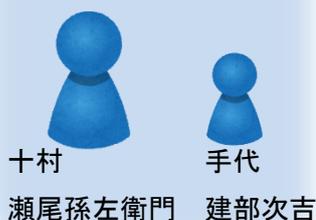
登場人物

前田家（金谷御殿）



十村（富樫組）

徳用村と前田家を取り次ぐ



徳用村



※十村とは、数十の村を取りまとめた組長のことです。手代は、十村の下で実務を担当した者のことです。